

# 秋田仙北の小正月行事

## —六郷町のカマクラを中心に—

八木 透

### はじめに

秋田県東南部地域には、カマクラと称する小正月行事が伝えられている。これは小正月の左義長から発展したものであるといわれているが、行事の内容や名称も地域によって異なり、また“カマクラ”の語源に関しても、諸説があって定かなことはわかっていない。今日もっともポピュラーなものは、ドーム状の雪洞を作り、中には水神を祀って子どもたちが道行く人たちを招き入れて甘酒などを振舞う行事として、横手市で行われているカマクラが有名であるが、これは種々の形態を見せるカマクラ行事の一方式に過ぎない。

本小論では、カマクラ行事のルーツを探り、秋田県仙北地域に見られる種々のカマクラ行事の変遷過程について解明することを目的として、1982年に国の重要無形民俗文化財に指定された秋田県仙北郡美郷町六郷(旧六郷町)の「カマクラ」を事例としながら、カマクラ行事の民俗的意味について考察してみたいと思う。

### ① 六郷町の小正月行事

美郷町六郷地区では、延暦21年(802)に征夷大将軍坂上田村麻呂が創建したと伝えられる諏訪神社の小正月行事として、「カマクラ」が2月11日から15日にかけて行われる。六郷のカマクラは、天筆まつり・鳥追い行事・竹打ちの3つの部分から成り立っている。

まず六郷地区における小正月行事の概要を紹介することにした。なおこの地域の小正月行事は、今日では月遅れの2月の行事とされていること



横手のカマクラ



横手のカマクラの内部

をあらかじめご承知いただきたい。2月11日は「蔵開き」である。元々は正月元旦から11日まで米の蔵出しを休む習わしがあり、蔵の前に据え膳をしてお灯明をともし、この日から蔵出しを始める。なおこの日に「鏡開き」も併せて行われる。また11日には、各家で子どもの数だけ「天筆」を準備し、いわゆる「書初め」が行われる。「天筆」とは白紙か5色の和紙を長く継ぎ合わせたもので、そこに「奉納 鎌倉大明神天筆和合楽」あるいは「奉納 蔵徳大明神天筆和合楽」などの縁起のよい文字が書かれる。基本的に自分のものは自分で書くのだが、自分で文字が書けない幼年者は親が代筆し、15日の夜にカマクラに持って行く。元々は男の子の人数分だけ天筆が書かれたが、現在は女の子の分も準備されている。「天筆」は15日まで家



六郷の諏訪神社と門前に立てられた天筆

の戸口に立て掛けられるため、通りかかった者にはその家に何人の子どもがいるかがすぐにわかるのだという。

12日は市が開かれ、小正月年越しの準備の日といわれている。13日あたりから鳥追小屋と雪宮作りが始まる。稲に害をもたらす、いわゆる害鳥を追いかけることを目的として、

子どもたちが籠るための小屋作りの習俗が伝えられているのは、長野県、新潟県、山形県、秋田県に広がり、その小屋の名称も、鳥追小屋・鳥追洞・ほんやら洞などさまざまである。近年観光行事として世に広く知られるようになった横手市のカマクラは、雪で作られたドーム状の雪洞であ



北軍の本陣と雪宮

るが、菅江真澄の挿画からもわかるように、本来は天上のない雪洞で、雪を40cmくらいの厚さに四角に積み上げて、天井に茅を編んで作ったむしろを載せたものである<sup>(1)</sup>。その意味では、六郷の鳥追小屋はまさに古い姿を今に伝えるものであるといえよう。また六郷では、小屋のすぐ前に「雪宮」とよばれる小さな神殿を作り、その中に「鎌倉大明神」が祀られる。子どもたちは互いに鳥追小屋を訪問し合い、鳥追いの歌を歌ったりして遊んで過ごすという。

いよいよ15日になると、小正月の餅つきが始まり、まゆ玉を作って神棚を飾る。そして15日午後7時頃、勢いよく木貝が鳴り、各町内で必勝祈願出陣式を終えた若い衆が青竹を担ぎ結集してくる<sup>(2)</sup>。約5mほどの竹を上下に振り下ろし叩き合う「竹うち」が始まる。やがて9時頃、ひときわ高く木貝が鳴り響けば、神官が松におをお払いし、これに点火して3回目の



鳥追小屋



雪宮の奥に「鎌倉大明神」が祀られている

竹打ち決戦が行われる。天筆を焼くかがり火の中での決戦である。これを天筆焼きという。そして、この竹打ちで北軍が勝てば豊作、南軍が勝てば米の値が上がると言い伝えられている。竹打ちの3回目の決戦の際に、正月の注連飾り、神符や門松とともに天筆が焼かれる。

以上のように、六郷の小正月行事は15日のクライマックスである「カマクラ」、すなわち「竹打ち合戦」と「天筆焼き」を中心として、その準備段階でもある「天筆作り」と「鳥追小屋作り」という3つの行事が同時進行的におこなわれることが大きな特徴だといえる。

## ② カマクラの語源について

そもそも、六郷の小正月行事の総称でもあり、また横手では、子どもたちを中心としたメルヘンチックな雪洞を意味する“カマクラ”とは、何を意味する語なのだろうか。さらに、六郷の鳥追小屋に祀られる「鎌倉大明神」とはいかなる神なのか。

カマクラとは、一般には秋田県において小正月に行われる左義長の行事で、鳥追いや塞の神祭も含めた、小正月行事の総称として理解されている。カマクラの語源と由来について、『日本民俗大辞典』の「かまくら」の項で稲勇次は次のように述べている。すなわち、カマクラの由来には6つの説があるとし、それは「(一)竈のカマから発したカマド説、(二)鎌倉権五郎をまつたことから名付けられた鎌倉権五郎説、(三)鎌倉幕府樹立を祝う鎌倉幕府説、(四)水神の祭典とする水神説、(五)鳥追鎌倉や鎌倉の鳥追から出た鳥追小屋説、(六)神座・神倉のカミクラが転訛したカミクラ説」であるという<sup>(3)</sup>。この中で、筆者がもっとも信憑性が高いと考えるのは(六)の「カミクラ説」である。そもそもカマクラ行事は、小正月に神を迎えて祀り、来る秋の豊穡を祈願する、いわゆる予祝行事であることを前提として考えると、神を迎える依代としての何らかの「神座」が必要であったことというまでもないだろう。その際の、神の依代としての象徴が、たとえば六郷においては「天筆」であり、また竹打ちに用いる「竹」であり、また「鳥追小屋」だったのではないだろうか。

一方で、柳田國男を監修者として編纂された『総合日本民俗語彙』の「カマクラマツリ」の項では、「小正月の子ども行事全体を、秋田県中部では鎌倉と呼ぶようになっているが、その中心をなすものは雪穴の生活と、15日の朝この臨時の小屋の前で、大火を焚き鳥追いの歌をうたうことである。名の起こりは、その歌に、“かまぐらの鳥追いは、頭切って鹽つけて、鹽俵にうち込んで、佐渡ヶ島へ追うてやれ云々”というのからでたこと疑いない」と記されている<sup>(4)</sup>。このことから、柳田を中心とした本書の編者たちは、カマクラの語源を「鳥追い歌」の歌詞に登場する「カマクラ」に求めている。しかしこの「カマクラ」が果たして何を指すのかは必ずしも明確ではない。

また、文化年間に記されたと伝えられる「出羽国秋田領風俗問状答」には、「十四日道祖神祭の事」として六郷のカマクラ行事の様子が詳しく記されている。その中で、たとえば鳥追い小屋に関しては「鎌倉の祝の體は、二日三日なかり前より門外に雪にて四壁を造り、厚さ一尺二尺にし、水そそぎ氷かためて、それを其日には茅を積み」と書かれていることから、当時においても今日とあまり変わらぬ雪壁の小屋を築き、屋根は茅で覆っていたことがわかる。また「紙の旗に鎌倉大明神と書候は、いかなる神にて候や」と記されていることから、当時の人々には、すでにこの神の正体がよくわからないものになっていたことがうかがえる。さらに続けて、「鎌倉の鳥追は、頭切て鹽つけて…」という、先述の『総合日本民俗語彙』と同じ鳥追い歌を紹介している<sup>(5)</sup>。

ところで、『六郷町史』では、カマクラという語源に関する先学の諸説を引きながら、結論として「鎌倉は吉書焼きの遺風であることは勿論であろうと思うが、雪城を襲撃することや打合戦のあることから見て模擬戦であることから想像して相州高時没落のことを諷したもので、自然に誰いうとなく鎌倉と呼ばれ」と記され、カマクラとは、鎌倉幕府最後の執権であった北条高時の落城に由来した語であるとしている<sup>(6)</sup>。しかし、果たして本当に「カマクラ」は鎌倉幕府のカマクラなのだろうか。

筆者は、そもそもカマクラとは“神”の“座”…すなわち、“カミクラ”が語源ではないかと思う。そこへ後三年の役の伝説上の人物で、後に怨霊信

仰として知られるようになる「鎌倉権五郎」の伝承が被さって、やがて行事そのものを“カマクラ”と称するようになったのではないかと考えている。このことを裏付ける事例として、柳田新田村(現秋田市)で作られる鳥追小屋の奥正面に、「権五郎さん」と称される弊束を祀り、お神酒や餅を供えるという伝承がある<sup>(7)</sup>。「権五郎さん」とは鎌倉権五郎のことであろう。とすれば、六郷の鳥追小屋で祀られる「鎌倉大明神」も、鎌倉権五郎を指していると考えるのが妥当なのではないだろうか。

### ③ 小正月行事としての“鳥追い”・“火”・“合戦”

次に、カマクラ行事と火、および「竹打ち」に象徴される合戦との繋がりについて考えてみたい。

カマクラにはなぜ“火”が頻繁に登場するのであろうか。たとえば今日、横手で行われているカマクラは、一切火は用いず、雪洞の中に灯明を灯して水神を祀り、子どもたちがその中から道行く者たちを誘うという、きわめてなメルヘンチックな行事である。しかし横手でも、明治初期までは、「鎌倉大明神」の旗を立てた火祭りであったといわれている。それがやがて火災防止のために廃止となり、後に水神祭と習合して今日の姿になったと伝えられている<sup>(8)</sup>。そうすると、今日の雪洞を築く横手型の「カマクラ」は新しいもので、先述したように、本来は天上のない雪洞で、茅や藁を屋根として被せたものであったことが改めて理解できよう。カマクラ行事は小正月の行事ゆえに、鳥追小屋・鳥追い歌・左義長・塞の神祭り等の要素が習合しているので、その意味では一種の「火祭り」であることは当然だといえる。たとえば、角館では「火振りかまくら」と称する行事が行われている。これは、わら紐の先に付けた稲わらを編んで作った小さな俵に火を付けて振り回すもので、神聖な火で田の厄を払うとともに、五穀豊穣・無病息災・家内安全など、一年の無事を祈願するものであると伝えられている。これなどは、まさに小正月の「火祭り」としての「カマクラ」の象徴的な事例だといえるだろう。

次に、六郷のカマクラ行事の「竹打ち」のような、“争いごと”が付随す



竹打ちの会場と天筆



天筆焼き

ることの背景について考えてみたい。ひとつには、「カマクラ」が小正月行事であるために、「年占」としての交戦が行われるという解釈が可能であろう。また一説によれば、カマクラで「竹うち」のような戦乱の模様を演ずるのには、近世の文献に雪城を焼き崩すという伝承が伝えられており、そこでは、鎌倉幕府最後の執権である北条高時が新田義貞によって攻め滅ぼされた時の様子を模して行われたとしている。しかしこのような伝承は、鎌倉時代の歴史がいかにして秋田のカマクラ行事に伝わったのかがまったく不明である限り、やはり諸説ある中の一説として捉える必要がある。名称のみに依拠して、小正月行事としての「カマクラ」を「鎌倉幕府」との関連において理解せんとする視座は、本来の「カマクラ」の語源や民俗的意味を曲解させることにも繋がりがねない俗説であると捉えるべきであろう。すなわち筆者は、カマクラにおいて“火”が登場することも、また“合戦”の形式をとるという点においても、いずれも小正月行事との繋がりにおいて理解することが妥当なのであり、そこで行われる種々の儀礼は、すべて予祝行事の一方式として捉えるべきだと考える。

## むすびにかえて

これまでの考察により、カマクラ行事の古い姿は、小正月の左議長と鳥追いを中心とした予祝行事であり、当然ながらそこには火祭りとしての要素が色濃く見られるものであった。そこでは「鳥追い」行事の舞台として

の「鳥追小屋」が築かれるわけだが、それは、元来は菅江真澄の挿画のごとく、天井のない雪洞であり、そこに祀られる神として、怨霊信仰の対象とされ広く知られるようになる「鎌倉権五郎」の信仰が被さり、さらに後には水神信仰とも習合して、今日の横手に見られるような行事に変化してゆき、同時に行事の名称も、神の依代としての「神座」と、秋の豊穰を妨げる象徴としての怨霊、本来は祓われるべき対象としての怨霊を、小正月にあえて丁重に祀ることでその力をプラスに転化し、豊穰を祈願するという予祝の祭祀対象としての「鎌倉権五郎」の信仰が合わさって、「カマクラ」と呼ばれるようになったものと考えられよう。さらに、そこへ小正月行事の一特質でもある「年占」が習合して、六郷の「竹打ち」に代表される合戦形式の行事に発展していったと理解するのが妥当であろうと思われる。

しかし秋田県南東部の地域の小正月行事に、なぜ「鎌倉権五郎」をめぐる怨霊信仰がこれほど大きな影響を与えたのだろうか。またなぜその信仰が鳥追い歌の中にまで入り込み、長く伝えられてきたのだろうか。まだまだ不明な点が残る。今後は、東北地方における小正月行事を広域において精緻な調査を実施し、それらの背景にある伝承を探るとともに、歴史的な視座からもより厳密な分析を試みる必要があるといえるだろう。

## 【注】

- (1) 菅江真澄は18世紀末から19世紀初頭にかけて、六郷を二度訪問している。1回目は天明5年(1785)で、この時は訪問というよりも通過に近かったようだ。2度目は文政10年(1827)で、この時は彼の代表的な地誌である『月の出羽路仙北郡』の編纂の最中であつた。「仙北郡十六」の中に雪壁で仕切られ、屋根は茅のような草で覆われた四角い小屋と、その周りで大勢の子どもたちが戯れる様子が描かれている。(『菅江真澄全集』第八巻、未来社、1979年)
- (2) 「木貝」とは、竹打ちの際に用いられる独特の形状をした木製のラップである。七枚の杉の板を用いて樽状に作られる。菅江真澄は『月の出羽路仙北郡』の中で、天筆が立てられた中を、二人の人物が60cmほどの木貝を吹いている様子を描いている(『菅江真澄全集』第八巻、詳細は前掲参照)。また『出羽国秋田領風俗問状答』の「十五日歳の神の事」にも、「村里にて



## 秋田仙北の小正月行事

は、この日夕暮近きより村童等打群て、木のほら吹きならし、田面に出わたり鳥を追うまねびし、近き里々へも行きめぐる」と記されていることから、これは元は鳥追いに用いられたものであったことがわかる『諸国風俗問状答』(『日本庶民生活史料集成』第9巻、三一書房、1969年)。

- (3) 『日本民俗大辞典』「かまくら」の項(『日本民俗大辞典』上巻、389ページ、吉川弘文館、1999年)
- (4) 『総合日本民俗語彙』「カマクラマツリ」の項(『総合日本民俗語彙』第1巻、395ページ、平凡社、1955年)
- (5) 『出羽国秋田領風俗問状答』(『日本庶民生活史料集成』第9巻、三一書房、1969年)
- (6) 『六郷町史』文化編(六郷町、1991年)
- (7) 宮崎進「かまぐらの語源と歴史」(『出羽路』第14号、1961年)
- (8) 宮崎進「かまぐらの語源と歴史」(詳細は前掲)

### 【参考文献】

- 菅江真澄『月の出羽路』仙北郡16 (『菅江真澄全集』第8巻) 未来社 1979年
- 宮崎進「かまぐらの語源と歴史」(『出羽路』第14号) 1961年
- 安倍莞爾「かまぐらのふるさと」(『仙北風土記』下巻) 1984年
- 稲 雄次『カマクラとぼんでん』秋田文化出版社 1990年
- 六郷町史編纂委員会『六郷町史』下巻・文化編 1991年